

底が突き抜けた」時代の歩き方 509

「狂気は社会によって＜発明＞される」- コロンバイン高校銃乱射事件

99年、アメリカのコロラド州にあるコロンバイン・ハイスクールで起きた銃乱射事件は、二人の在校生が銃を乱射して13名の高校生を殺害した、アメリカ学校史上最悪といわれた事件である。一時は犯人の一人と疑われた犯人の同級生であったブルックス・ブラウンが、新聞記者のロブ・メリットと共に書き上げた回顧的ルポルタージュ『コロンバイン・ハイスクール・ダイアリー』で、事件はネオナチとかドラッグ、テレビゲームに影響されて惹き起こされたのではなく、一見きれいで平和なコロラドの郊外住宅街の内閉的な日常生活の裏側に、陰湿な行為をじわじわと潜ませ、蓄積させてきたことによる大噴出であったことを明らかにしている。なによりも犯人たちは小さな頃から、日常的にずっといじめられ、学校教師や同級生、そして親や家族からも排除されてきた。

この事件もまた、子供たちによって惹き起こされる事件には、必ずといっていいほど、「いじめと排除」がその根底に横たわっているという定説どおりであったが、「いじめと排除」に対する反撃が絶望的な報復として、相手の抹殺や破壊のかたちを取るようになるのも定説どおりであった。「やられたら、やり返す」という自爆行為に例外はなかった。この事件はマイケル・ムーア監督のドキュメンタリー映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』の題材にもなっていたが、江川紹子は連載「千思万考」の「今日とは違う明日がある」(『サンデー毎日』05.7.3)で、山口県立光高校において18歳の男子生徒が「からかわれて腹が立った」ために、手製爆弾を教室内に投げ込んだ事件に触れて、『ボウリング・フォー・コロンバイン』でインタビューされる 同校卒業生のマット・ストーン青年の話が印象的だった と語っている。

ストーン青年によれば、同校を「耐え難いほど平凡」だった。生徒間のトラブルがあっても、先生もカウンセラーも助けてくれなかったと、彼は学校には批判的だ。1学年上の数学の試験に挑戦した時には、先生から「今失敗したら、来年もうまくはいかない」と言われた。先生は、「だから、今がんばれ」と励ましたつもりかもしれないが、青年は「今失敗すると、一生負け犬だ」と受け止めた。

「(犯人の)二人も、いじめられて、『一生いじめられる』と思ったんだろう。『今ダメなら、一生ダメ人間』と言われれば、そう思ってしまう。でも、現実には逆なんだよ。学校を落ちこぼれた人が成功し、優等生が地元に戻って来て細々と保険の外交をやったりしている。そういうことは、(本やインターネットではなく)じかに人から教わるものだ。もし、彼らもそれを教わっていたら……誰かが教えてやればよかったんだ。『高校を卒業すれば、あとは自由になれる』って」

二人は、高校を卒業するまで、あとわずかだった。学校を出れば、これまでの人間関係を断ち切り別の世界に身を置くこともできる。けれども、今日とは違う明日を想像できないほど、二人は心の余裕や希望を失い、屈辱感や怨念、敵意だけを募らせていったのかもしれない。人生の最後に派手な報復劇をやってみせたつもりなのだろうか。》

光高校の事件の犯行者である男子生徒も3学年で、半年もすれば卒業で高校とおサラバできたのである。もちろん、問題はなぜ、あと少しの我慢ができなかったのかにあるのではない。ストーン青年が言うように、「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」ってことを教えてやる者が彼らの周囲にいなかったところにある。《今日とは違う明日がある。明日がダメでも、あさってがある。明日の自分に希望をつなごう。 - そんなメッセージを、誰がどうやって、子どもたちに伝えていくか。これが課題だ》と、江川氏は結ぶが、問題は重層しているにちがいない。そんなメッセージを伝えていく者がどこから、どのようにして登場してくるのが、皆目見えてこないからである。「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」し、「半年たてば、事態は変わる」と声をかけてくれる者はいるのか。いるとすれば、彼は一体どこで、なにをしているのか。

いうまでもなくその声をかけてくれそうな「誰か」を周囲にまず求めるとすれば、その「誰か」は親や家族かもしれないし、学校教師や同級生かもしれない。しかし、その親や家族こそが子供たちを排除する身近な者たちであって、受け入れてくれることは到底考えられなかった。というより、親や家族というものは子供たちが受け入れられるように振舞ってみせないかぎり、子供たちをけっして受け入れなかったし、心を閉ざしている子供たちをますます排除していく傾向にあった。学校教師や同級生にしても、同様であった。誰もが自分の言うことを聞く子供たちしか受け入れようとしなかった。ストーン青年の挑戦に教師が、「失敗してもいいから、がんばれ」と励まさなかったのは、教師の「今失敗したら、来年もうまくはいかない」という言葉を彼が聞き入れなかったからだ。彼は励ましを求めたのに、教師から返ってきたのは励ましではなく、「今失敗すると、一生負け犬だ」と、彼が受け止めざるをえなくなる宣告だった。

「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」と言ってくれる「誰か」は、親や家族からも、学校教師や同級生からも、やってくることはなかった。彼らは「今ダメなら、一生ダメ人間」という視線で、「高校を卒業したからといって、なんにも変わらないぞ」と言いつづける者たちであった。では、子供たちの肩を軽く叩いてくれる「誰か」はどこからやってくるというのか。その「誰か」が現れるまで待ちつづけなくてはならないのだろうか。そのときまで惨めな思いをして、我慢しつづけなくてはならないのだろうか。人はいつ現れるかわからない「誰か」をいつまでも待ちつづけることができるものなのか。もしかすると、犯行者の少年たちも待って待って、待ちつづけた挙句、「誰か」はどこからも現れないことを見切ったのではなかったか。だからこそ、「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」のとは反対に、高校卒業前に決着をつけておきたかったのではなかったか。

《ストーン青年が言うように、誰かが「半年たてば、事態は変わる」と声をかけていれば、ため込んだ怨念を逃がす出口を見つけられたかもしれない。また、現実社会の人間関係は、学校での関係よりも多様であり、学校での半ば固定化した序列も、現実の社会の中ではしばしば大逆転すると実感できれば、違う選択も出てきたのではないか》と江川氏が言うことも、腑に落ちない。学校が地獄であるなら、そんな学校にしてしまっている社会もまた、地獄ではないのか。学校で息抜きすることがしだいに困難になってきているとすれば、現実社会もまた、息抜きしにくくなりつつあるのではないだろうか。

《学校での半ば固定化した序列も、現実の社会の中ではしばしば大逆転すると実感でき》なくなりつつある、そんな社会がアメリカでも日本でも（に限らず）到来しているのではないだろうか。犯行者の少年たちがそんな空気を感じ取っていなかったとはいえない。

つくづく思う、「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」って言ってやるのがけっして嘘ではなく、本当のことであり、学校での評価なんか、現実社会ではいつでも引っ繰り返すことができる、と胸を張って励ましてやることができればなあ、と。もう、そんなことを教えてやることができなくなってしまっている社会なのだ。子どもたちにせいぜい言えることは、高校を卒業しても息苦しさは続くかもしれないが、親や教師からはああしろ、こうしろと監視される窮屈さから逃れられることは確かだ、もっとも会社の監視がそれにとって代わるとしても、イヤならやめることができるし、逆に我慢して自分の生活の安定に努めることもできる、と。あるいは、半年たっても、事態は変わらないとしても、いま当面しているイヤな奴らの顔を毎日見なくても済むことは確実だ。次に出会うイヤなことなど考えずに、いまイヤなことは半年たてば、おサラバだから、半年たったその時にどうするかは考えればいい、と。

その程度のことを言ってやれるなら、上等だが、そんな「誰か」が公園の椅子に1人座っているときに、隣に腰をかけて、お^{あつら}誂え向きに語りかけてくれるとでもいうのだろうか。ハンバーガーショップで1人コーラを飲んでいるときの寂しげな様子を感じ取ってくれて、知り合いでもない少年にすべてがわかっているといった調子で相手してくれるような、奇特で暇を持て余している人はその辺にゴロゴロしているのだろうか。そのように一つひとつ思い巡らしていくなら、ストーン青年が軽く言っているように聞こえる。「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」という言葉が、実はとんでもなく困難な^{あいろ}隘路であることがわかってくる。そんなことを教えてくれる人がいるということは、自分の悩みを打ち明ける人がいたり、そんな関係を「誰か」と結ぶことができているということである。つまり、事件など起こらないということだ。

コロンバイン高校の銃乱射事件であれ、光高校の爆弾事件であれ、あるいは他のさまざまな少年の事件が明らかにしていることは、少年たちの周囲には「高校を卒業すれば、あとは自由になれる」ことを教えてくれる「誰か」はどこにもいないということである。その「誰か」が子供たちの周囲にいたなら、大半の事件が防ぐことができるにちがいない。社会はそのような「誰か」を生み出す余地もないほどに、個々人の生活保守主義を

徹底化し、地域共同体の貧しさを曝け出している。子供たちの周囲には、いじめや排除を募らせる関係は吹き荒れていても、子供たちをそのままの状態を受け止めてくれる関係は荒涼としている、といった地点に立ったうえで問題を考えねばならなくなっているのだ。救いの手はどこからも差し伸べられないし、救いの手などもはや期待できなくなっているなかで、考えに考えを積み重ねる以外になんの術もなくなっている。

しかし、考えに考えを積み重ねて、一体、どこに赴くことができるというのだろう。子供たちがますますバラバラに孤立していく閉塞状況を、どのようにして打破できるのか。もちろん、バラバラに孤立しているのは子供たちだけではない。大人はもっと凄まじいだろうが、大人には狡さもしたたかさもあり、迂回することも心得ている。そんな術をもたない分、子供たちは孤立に直撃されているといえよう。おそらく開放感のない生き方に終止符を打つために惹き起こされたにちがいない、コロンバイン事件の犯行者である二人のうち、一人は事件の1ヵ月前に「殺人小説」を予告として書き、もう一人は「犯罪計画ノート」を記していたことが明らかになり、それぞれ『週刊現代』の04・11・6号と11・20号に抜粋して掲載されている。そのなかから、いくつか拾ってみよう。ディラン・クリーボルドの小説は、《全身黒づくめの男》が午前1時をまわった、人気のない通りを歩いている描写から始まっている。

《黒づくめの男からは、ただ足音しか聞こえてこない。(…)一步一步、歩みを進めるたびに、彼のベルトチェーンが音を立てる。これ見よがしにホルスターにぶら下げた2丁の拳銃と、いつでも引き抜けるように吊革に引っ下げられた大きな獵刀が鎖にぶつかる音だ。

鰐広の帽子の影に隠れ、ただでさえ薄暗い彼の表情がなお陰影を濃くしている。手にはめた黒い手袋の甲には、金属の棘が突き出ている。全身をすっぽりと覆う黒いオーバーコートの肩から腕、背中にかけては、金属製の細いラインと1センチほどの棘が縫い付けられていた。おろしたてらしいブーツは丁寧に磨き上げられ、右手には黒いダッフル・バッグを抱えている。車は近くに停めているのだろう。

自分の歩みを邪魔する者は、誰であろうとぶちのめしてやる - 男は不穏な空気をあたりに撒き散らしていた。まるでマッドマックスばりだ。》

《男がぶら下げた2丁の銃は自動拳銃のようだ。彼が細いタバコを燻らせると、クローバーのような甘い香りが男の周囲に漂った。身長190cmでがっちりした体格。いまや男の顔はすべて影に覆われ、表情を窺うことはできない。だが、まるでレーザービームのように空気を切り裂いて発散される、激しい彼の怒りだけは手に取るように感じることもできた。》

9人ほどの高校3年生が店を出てくるその前で、男は立ち止まった。高校生たちの1人が、「ここで何してるんだよ。どうしてここにいるんだ？」と口を開き、「お前、オレたちとケンカをしたいのか？ だったら武器なんか使わずに、素手でやろうぜ。ピストルを置けよ。くそ野郎！」と他の者が続いた。「なかなかイケてるトレンチコートじゃ

ないか。あんたクールだよ」「オレたちや、ただこの辺で悪さしてるだけで、何もあんたに……」「オレは何もやっちゃいない。みんなこいつらが悪いんだ」「まさか撃つ気じゃないよな。みんな見てるぜ」。最初は小声で、「やれよ、オレを撃てよ。撃ってみろってんだよ。撃たないのか。この野郎！」と毒づいていたが、徐々に勢いづいてきた。

《黒い男が笑ったのはその時だ。もし悪魔が耳にしたら、地獄で怯むような笑い方だった。進^{ほとぼし}るほど力^{みなぎ}漲る男の笑いは30秒近くも続き、あたり一面の空気を満たし尽くした。この街全体に、いや世界中にさえ轟き渡るほどだった。街の喧噪は消え去り、あらゆる人の耳目がこの男に集まった。

連中の1人が、そろりそろりと後ずさりし始めた。男はダッフル・バッグを足下に落とし、左手で1丁の拳銃を引き抜いた。3発の弾丸が放たれ、一番がたいのかいやツの頭に命中した。頭蓋骨から迸る血液が街灯に照らし出され、鈍く光った。シャワーのような返り血を浴びた高校生たちは、逃げる力さえ失ったようだった。

続く4人の処刑は、雑然と執行された。兵士に義務づけられている冷静さとはほど遠い、激しい怒りが男の構える銃口から噴き出した。横様に銃を振りながら男が弾をぶっ放すと、何の罪もない4人の体は瞬く間に命を失い、ぱったりと崩れ落ちた。銃声は耳に響き、体へは衝撃波として押し寄せてきた。

男がもう1丁の拳銃を引き抜く。残る4人を睨め付けたまま、8発の弾丸を自分の真横に撃ち放つ。一瞥もくれぬまま放たれた8発の弾丸は、銃の吊し方から判断して僕が秘密捜査官だと目星をつけていた男を薙ぎ倒した。

黒い男はさらに2人を撃ち殺し、弾倉を空にする。弾丸を再び装填し、“仕事”を完遂する代わりに、男は2丁の銃を地面に置き、猟刀を取り出した。彼の大きな手のひらに握られても、猟刀の刃は不気味なほどの存在感を示していた。

(中略)残る1人は、アメフトで覚えたタックルが自分の命を救ってくれることを期待したのか、男に向かって突っかかっていた。だが、軽やかに身をかわした黒い男は猟刀を閃かせ、2度にわたって深く刃を突き立てた。刺された男の腹から滝のように血液が噴き出し、コンクリートに血だまりを作る。頭に受けた傷も同様に深く、バーの灯りが顔から滴り落ちる血を照らし出していた。

最後に残った1人(...)は、その場から逃げ出そうとした。素早く銃を装填した男が、逃げ去る小さな男の足を目掛けて弾を撃つ。小さな男はもんどり打って倒れ込み、激痛にうめき声を上げる。》

《足を撃たれた最後の犠牲者は痛みにうめきながら、それでも這って逃げようとしていた。黒い男が、そいつの背中を追う。(…)小さな男に追いついた黒い男は、彼の頭を目掛け、左の拳を思い切り叩きつけたのだ。手袋の甲につけられた金属の棘が、忠実にその役目を全うする。男の拳は、小さな男の頭蓋骨に5cmほどめり込んだだろうか。男は腕を引き抜くと、身じろぎ一つせず、およそ1分間もただその場所に立ち尽くしていた。

かすかに聞こえてくるパトカーのサイレンを除けば、街は静寂に包まれている。男が

ダッフル・バッグを拾い上げ、やって来た道を引き返し始める。彼が近づいてきても、僕は一步も動かなかった。黒い男は立ち止まり、僕に一瞥をくれた。その時の彼の表情が、彼の視線が、今も脳裏に焼きついて離れない。もしも僕が、神の心情というものに触れる機会を得たとしても、そこに僕は、この黒い男の姿を重ねることだろう（註：教師はこの箇所に「？」マークをつけている）。

僕がこの時目にしたのは、ただ単に彼の顔だけにとどまらない。進むパワーを感じ、漲る自信に触れ、揺るぎなき神性を垣間見た。黒い男は静かに微笑んでいた - 。その瞬間、僕は何の苦もなく、彼の行動のすべてを理解し、共有できたのである》

作文の授業に提出されたこの小説の最後の文章の後に、「何という終わり方」と書き記した担当教師は、「ディラン君、あなたが文中で使用した冒瀆的な表現に気分を害しています。授業でそれについては話し合ったでしょう。この作文に点数をつける前に、内容について話し合いたいと思います。あなたが優秀な書き手であることは認めますが、この短編については内容に関していくつかの問題があります」という感想を述べ、「文学的」だが、「ゾッとする」とも書いた。事件後の調書での彼女の述懐が、こう書き留められている。

「数週間前、ディラン・クリーボルドは、作文の授業で今まで読んだこともないような悪意に満ちた文章を書いています。（中略）あまりにも悪意に満ちているので、本人を呼んでその旨を伝え、学校のカウンセラーにも作品のコピーを渡しました。彼の両親も交えて話し合いを持ちましたが、ディランは『作り話にすぎないよ』と歯牙にもかけませんでした。エリックはマシンガンを構える格好をしょっちゅうしていました。作品も軍隊を扱ったものが多かった」

記事はこう続いて、締め括られる。

《この小説の全文を、長く少年犯罪の調査に関わってきた教育心理学者でバージニア大学教授のデューイ・コーネル氏に読んでもらった。氏には日本を震撼させた二つの少年犯罪に関する資料も送り、併せて分析を依頼した。酒鬼薔薇聖斗を名乗った中学生による神戸幼児殺傷事件と、長崎・佐世保の小学6年生女兒による同級生殺害事件である。いずれの事件も、加害少年が犯行を匂わせる文章を事前に書き記していた点が、コロンバイン事件と共通している。

「友人関係や勉強などにおいて子供が問題を抱え込んだ時、その解決策として暴力を用いることは珍しくありません。厄介なのは、子供たちにとって法的な罰則が抑止力にならないこと。コロンバイン事件や日本の二つの事件のように、事前に犯行をほのめかすような行動をとる場合には、『捕まりたい』とさえ考えていることもある。子供たちが指し示すサインを見逃さず、徹底して注意を向けることで事件を未然に防ぐ努力を続けなければいけません」

‘97年からの6年間で、全米で逮捕された少年殺人犯は計6361人。同期間の日本では、583人が人を殺める罪を犯している。

すべての事件は起こるべくして起こる。1ヵ月前の予告小説が見逃された代償はあまりにも大きかった。》

「予告小説」というが、事件が1ヵ月後に、小説の中の「黒い男の姿」に重ね合わされるようにして書き手自身が銃をブツ放すことになったから、「予告小説」であったわけではない。担当教師がいうように、創作が「悪意に満ちた文章」であったから、問題だったのでもない。書き手自身と思われる創作の中の「ぼく」が、すなわち、書き手自身が主人公である「黒い男」の殺戮を描写しながら、その主人公に熱く憧れているところに問題があったとみなさざるをえない。9人の高校生を虫ケラのようにためらいもなく銃撃して殺戮する主人公への彼の憧れは、「神の心情」とか「神性」という言葉にみられるように、尋常なものではなかった。主人公への憧れは当然、主人公の殺戮行動への憧れにほかならなかった。書き手が主人公に憧れ、主人公のように行動したいという願望を持ちつづけている限り、彼が主人公の「黒い男」のようにいつか現実の中へ登場したいという熱い衝動をかかえこんだままでは必然であった。現実の中ではけっして「黒い男」のような、マシンガンを手にして障害物の男どもを一瞬のうちに蹴散らしていく格好良さを微塵も持ち合わせていない書き手が、創作の中で自分がそうなりたいと願う主人公を描きながら、いつかはその主人公のように現実の中へ登場したいという祈念が創作の中に溢れ返っていることによって、「予告小説」であったといわざるをえない。

もう一人の事件の首謀者であるエリック・ハリスによって凶行の約1年前から綴られた「犯罪計画ノート」は、《事件の骨格を組み上げ、犯行を具体化する過程でより重要な役目を果たした》とみられ、《より直截的な殺意に溢れ、より現実の犯行に近い記述がなされている》という。《押収資料として捜査当局に秘匿され、ようやくコロラド州が公開許可を出したのはこの9月のことだ。しかし、事件を直轄するジェファソン郡の裁判官は全文の公開を渋り、まだ公にしていない。》

神よ、世界中のありとあらゆる病毒素に対するワクチンを奪い去ってくれ。危険物への警告ラベルなんて必要ない。すべてを「自然淘汰」に任せてくれたら、どんなにか素晴らしいことだろう。デブで醜い、脳足リンのクソ野郎どもは、みんな死んじまえばいい。そうだ。まともなヤツらにだって、死人が出ればいいんだよ。(以下略) という98年4月26日の記述から始まる「ノート」はこう続く。

世界中の全員を「運命1」に入れて、誰が「レベル1」をクリアできるか見てやろう。……いや、オレの「ワールド」にブチ込んで、アホどもがみんな死に絶えるのを見るのも悪くないな(「運命」や「レベル」、「ワールド」はいずれもハリス独自の表現で意味は不明)。

NBK(Natural Born Killers:生まれつきの殺人者) - この言い回しは気に入った。4月のどこかで、オレはV(Vodkaの頭文字。クリーボルドのニックネーム)と復讐をおっ始めて、自然淘汰を2~3段階推し進めてやるんだ。大きな爆発音を響かせるクリケット(ハリスが好んで使う言葉で、爆薬や釘などが詰まった、小型の二

酸化炭素カートリッジを指す)をたくさん入れたテロリスト・バッグ、スプレー用カンに金属片を山ほど詰めたパイプ爆弾、火炎瓶、塩素ガス爆弾、発煙筒を使ってやる。銃についてはまだ入手できていないが、Vが自分の銃と弾丸を持ってきてくれるだろう。

オレは散弾銃の弾丸を持ち歩く。(中略)そいつを黒ずくめの服の胸にかけて持つ。ダスターコートに、軍隊用の黒いパンツ、背中にR(REB:ハリスのニックネーム)とVを大きく入れて、表には小さな文字で「NBK」と入れた特製シャツだ。ナイフと獵刀、それにバックアップ用の武器を体中につけて、右腕には「REB」の刺青を入れるんだ。

学校へ向かう前、まず最初に乗り込むのはA(この部分は黒く塗りつぶされているが、事件後に共犯扱いされた同級生、ブルックス・ブラウンの名前が書かれていたことが判明している)の家だ。みんなが目覚める前に侵入して、一人残らず家族を殺す。最後にAを殺るんだ。みんな死んだら、ゆっくりと時間をかけて死体に小便をひっかけ、唾を吐き捨ててやる。その後は、時限爆弾を仕掛けて家をぶっ飛ばしてやろう

お次は学校だ。サングラスをかけて、テロリズムとアナーキズムが詰まったバッグを持ち込み、腰を下ろして景気付けの音楽を打ち鳴らしたら、最初のクリケットの束を投げる準備に取りかかる。点火したら、できるだけ遠くに投げるんだ。そいつが爆破したら、カオスの始まりだ。オレが銃をぶっ放し、Vは次のクリケットに火をつけて投げつける。2階に上がって片っ端から教室を覗いては、思うままにクソ馬鹿どもを狙い撃ちにしてやるさ。

.....警察が来やがったら、爆弾でぶっ殺してやる。逃げ場がなくなったら、塩素ガスを吸い込みながらクリケットをくわえちまえばいい。俺たちが死ぬときは、他のヤツらもみんな死ぬんだ。(以下略)

オレは世界に、消えることのない強い印象を残したい。

この一件で、オレとV以外の誰にも責任を問わないでくれ。オレの家族を責めるな。彼らには何の手がかりもなかったんだ。彼らにできることはなかった。両親はオレをちゃんと育ててくれた。

銃や爆弾の原料をオレに売った店も責めてはいけない。彼らにも、何の責任もない。オレたちが大量虐殺をやったからと言って、そこら中に警察を送り込むことは止める。爆弾や銃を学校に持ち込むようなヤツはオレたち以外にいないよ。(以下略)

さて、みなさん、今日はR(ハリス自身のこと)の歴史の中でもとても重要な日でした。Vと、名前は言えないけれどもう1人の人間と一緒に、武器を調達した記念日だ。連発式のショットガン、ポンプ連射式のショットガン、9mmのカービン銃、ショットガンの弾丸40発に獵刀を2振り。もう武器は手に入れたぜ。バカ野郎が! ハッハッハ.....(98年12月のノート)

オレはこのクソみたいな世の中が大嫌いだ。『お前のどこが特別なんだ?』と訊かれたらオレはこう答えてやる。

『オレとVしか持っていない特性がある。それは“自我の目覚め”だとね』

オレは、自分がこの世におけるどんな存在であるのかがはっきり分かっている。お前らがどれほどの価値を持った人間かも承知している。お前らが何を考え、どう行動するかが手に取るように分かるんだよ！　ここはもう普通の世界じゃない。地獄だぜ

N B K が早く使命を果たしたがってウズウズしている。オレは思いやりのある人間だが、この皮肉な現実は何だろう？　どういうわけか、目に映るものすべてがN B K に飲み込まれるんだ。映画が何かと錯覚するほどだよ。

オレはお前たちを憎んでいる。いつもオレを仲間はずれにしやがって。「お前のせいだ」とは言わせないぞ。お前らはオレの電話番号を知ってるし、誘ってくれて頼んだじゃないか。『エリックは気持ち悪いから無視しよう』なんて言いやがって、畜生！（最後に記された99年4月2日のノート）

日本人の想像を越える、高校生が簡単にショットガンや銃を入手できる事情については、ジャーナリストのアラン・ブレンダー・ガストが、「銃の種類や州によって購入できる年齢の制限は異なります。この事件を契機に、子供が銃を入手するのは難しくなりましたが、ブラック・マーケットはいくらでもある。実際には銃を手にするのは不可能でも何でもないと説明する。

《年齢や前科をチェックすることで銃犯罪の拡大を防ぐというお題目が唱えられているが、実効性を伴っていないのが実情だ。実はハリスの記述にある「もう一人」とは同級生の18歳の女の子。彼女は普通のガンショップで苦もなく銃を購入している。

（中略）実は彼らは'98年1月、カーラジオを盗もうと車上荒らしを行い、逮捕されている。この前歴により、ガンショップでこそ購入することはできなかったが、ガンマニアが不要になった銃を売買するフリーマーケットで簡単に手に入れているのだ。「銃へのアクセスが容易すぎる」とブレンダー・ガスト氏がため息を漏らすのも無理からぬことだ。

ちなみに車上荒らしで逮捕された際、二人は郡の更生プログラムを受けている。ハリスは、プログラムの最後に提出する作文の中で「更生プログラムの力を借りて、怒りを抑える努力をしたい」と書き、クルマの持ち主にも詫言状を送付している。だが、ハリスは件のノートの中でまったく違う顔を覗かせるのだ。

この車上荒らしは、オレの人生を最も大きく変えた重大な出来事だ。オレはこの経験から、どんな犯罪でも見つかって逮捕され得ることを学んだ。いかなる犯罪を犯す際も、捕まる可能性を考慮して、行動の前に綿密に計画を立てなければならない

同時にハリスは、こんな自信をひけらかす。

大人を騙すのは造作もない。バカみたいに簡単だよ。オレのまわりにうようよいいる、死にのみ値するすべてのバカどもを騙すのは他の何より簡単なんだ。オレは、お前たちよりも高みにいる。オレに文句があると言うなら、撃ち殺すまでだ》

98年3月にはハリスは自身のホームページ上に、ブルックス・ブラウンをぶっ殺してやると書き込んで、《ハリスは家宅捜索を受ける寸前まで追い詰められた。実際に捜

査令状も発行されたが、なぜか捜索は中止され、ハリスは野放しにされる》といった出来事もあり、《警察当局の怠慢による犯罪放置は、銃への容易なアクセスとあわせてアメリカ社会の病理の一つを示している。》

決行日として99年4月20日を選んだ理由について、ハリスは「アドルフ・ヒトラーの110回目の誕生日だから」と書き残しており、《4月20日の午前11時過ぎ、計画は予定通り遂行された。4時間後、特別機動隊がハリスとクリーボルドが立て籠もった図書館に雪崩れ込むと、10人以上の犠牲者に囲まれて、二人は事切れていた。ハリスはショットガンを口にくわえて自決しており、検死官が死体に触れたとき、パツクリと口を開けた頭蓋骨から大量の血が流れ出てきたという。「アメリカの病」を身中に抱えた死体だったのかもしれない。》

彼らの「予告小説」や「犯罪ノート」に向き合って、書き写しながらみえてくるのがいくつかある。まず犯行1ヵ月前に書かれたクリーボルドの「予告小説」は、ハリスの「犯罪ノート」を見せられたクリーボルドがそれに触発されて、それに対抗するように書かれたであろうという推測が湧き起こってくる。これから自分たちの手で惹き起こす史上希にみる凶行を前に、ハリスが「犯罪ノート」を遺書として残すなら、自分は小説のかたちで残しておきたいという、彼の得意顔が目の前に浮かんでくる。ハリスは「犯罪ノート」を1年間にわたって書き記しながら、世の中の人間に対して呪詛や悪罵を投げつけ、自分たちがまもなく愚かな人間どもに鉄槌を下すというストーリーのなかで、打ち震えるような昂揚感を味わっていたにちがいない。

ハリスとクリーボルドが根っからの悪ではなく、小心で悪者ぶりたがるが、本当は周囲に心を配る素直な不良の印象を拭えない。計画遂行後、「オレの家族を責めるな」とか、「銃や爆弾の原料をオレに売った店も責めてはいけない」というように、この世界の誰もが死に値する。生きる価値があるのは10人もいまい。もしオレの手に核爆弾を握ることができたなら、世界を破壊し尽くしてやる、と、物騒で禍々しいことを書いてはいても、その「犯罪ノート」のおぞましさに目を眩まされてはならない。文章の上でなら、どんなことでも書けるし、あらんかぎりの憎悪を叩きつけることができるからだ。そんなノートであっても、最後のノートには、「いつもオレを仲間はずれにしがって。（中略）『エリックは気持ち悪いから無視しよう』なんて言いやがって、畜生！」などと、それまでの威勢のよさとは打って変わって、犯行に対する弁解のような泣き言を並べている。

最後のノートであれば、それまでの悪罵と怨念の集大成のような文章であっても不思議ではないと思えるが、案に相違して、仲間はずれにされた怨みつらみを吐露する真情に溢れていた。凶悪犯行者のハリスは、そこではいじけた可哀想な少年にほかならなかった。いよいよ決行日が近づいてきて、おそらく心は逸りながらも、これから起こる血腥い凄惨な犯行理由を、いかに卑小であろうとも、正直に告白しておきたかったのであろう。あたかもオレたちがこんなドデカイ事件を惹き起こすことになったのは、お前たち

が「いつもオレを仲間はずれにしやがっ」たからだということは覚えているよ、と言わんばかりに。「『お前のせいだ』とは言わせないぞ」という文句の響きには、お前たちがオレを仲間はずれにしなければ、こんなことにならなかったという、犯行の途方もなさに対する^{きあく}氣後れを垣間見せているところがあった。

もう一つ、「神よ、世界中のありとあらゆる病毒素に対するワクチンを奪い去ってくれ」と、ノートに書きつけられていたように、ハリスには自分たちが計画している犯行は、“神をも恐れぬ所業”であるという考えは毛頭なかったことである。それはクリーボルドの創作のなかで、「神の心情」とか「揺るぎなき神性」という言いまわしが使用されていることとも共通していた。まさか自分たちの凶行が「神の意志」に添っているとは思っていなかったとしても、「神の意志」に反しているなどとは露ほども疑っていない感じであった。「もしオレの手に核爆弾を握ることができたなら、世界を破壊し尽くしてやる」といった、悪魔の如き所業にも似た凶悪さであったにもかかわらず、彼らには神を超えようとする意志はなかったのである。このことは裏返せば、彼らは自分たちがどのようなことをしようとも、自分たちもまた、死後神の元へ行けることを些かも疑っていないことを物語っていたにちがいない。

いうまでもなくハリスとクリーボルドがいかに仲間はずれにされ、いじめを常に受けていたとしても、彼らが惹き起こした凶行は、彼らのいじめに対する報復としてはあまりにも大きすぎた。というより、報復が事件のかたちをとって成就されるには、とてつもなく理不尽すぎた。つまり、報復と事件との釣り合いは全く取れていなかった。もし彼らの報復を具体的な行為のかたちであらわすなら、せいぜい連中を袋叩きにするか、勢い余ったとしても刺傷が関の山であった。怨みが骨髓に徹していても、その爆発はその程度で収めるしかどんな方途もなかったし、時間の経過にまかせて済ませようとする人々も多かった。ところが、銃が容易に入手できるアメリカでは、怨みつらみが銃を媒介することによって、報復の具体的なかたちが途方もなく膨らんでいくのである。いいかえれば、銃がなければ時間と共に解消されたかもしれない怨みつらみが、銃によって報復を十二分以上に果たせるようになってしまったのだ。

ハリスの犯罪ノートやクリーボルドの小説でいえば、銃の入手が予め断念されていたなら、彼らの文章は怨みつらみを綴っただけの作文にしかすぎず、もしかすると、白紙に文字を書き連ねることで怨みつらみは解消されていたかもしれない。ところが、彼らのノートや創作は銃の入手が可能な背景のなかで綴られていたために、入手した銃をぶっ放しさえすれば、ノートや創作の世界がたちまち現実の世界に変換されることを念頭に置いていたし、また念頭に置いて書かれていたのである。ペンを銃に置き換えれば、たちまちペンの世界が現実の世界に取って代わられるという考えほど、魅惑的な妄想はなかった。妄想を現実にする力を銃が持つなかで、少年たちが銃を振り回すよりも、銃が彼らを振り回すようにして、前代未聞の惨劇が学校を舞台にして繰りひろげられたのだ。

2005年10月30日記